

算数科における指導の重点（身に付けさせたい力） ※学習指導要領に照らし合わせて	
ア 思考力、判断力、表現力等	イ 知識及び技能
数とその表現や数量の関係に着目し、目的に合った表現方法を用いて数の表し方や計算の仕方などを考察する力を身に付ける。	整数、小数及び分数の計算をしたり、図形を構成したり、長さや重さを測定したり、図形の面積や体積を求めたりすることなどについての技能を身に付ける。

	児童・生徒の学力の状況（課題）	授業における具体的な手だて	手だての実施時期	成果検証（2月）
第1学年	- 文章問題など、思考を必要とする問題が苦手な児童が多い。ア - 数の基礎的な理解に、個人差が見られ、個別に支援が必要な児童が多い。計算カードを使った数の合成や分解の習熟に個人差がある。イ	- 問題解決学習が可能な学習単元では、比較・検討の場面において学級みんなで意見を出し合い解決していく学習を積極的に経験させ、上学年につなげられるようにする。ア - ノート指導では、ICT 機器を活用することで、どの児童にも分かりやすいように指導する。毎時間のめあてが確実に達成できているか、机間指導しながら確認し、できていない児童には、解決のポイントを指導する。計算問題では、朝学習や宿題等で繰り返し練習を取り入れ、定着を図る。イ	通年 通年	
第2学年	- 既習事項を使って問題を考えることが難しい。また、自分の言葉で考え（数の表し方や、計算の仕方など）を書くことに課題のある児童がいる。ア - 加減の基礎的な計算が身に付いていなかったり、遅かったりする児童がいる。イ	- 導入で前時の振り返りを行い、前時の学習を生かせるようにする。自力解決で他の児童のノートを紹介することで、より良いノートの書き方を共有する。ア - 毎日の宿題で反復学習を行い、基礎的な計算技能の向上を図る。イ	通年 通年	

第3学年	・学習内容を活用する文章問題や応用問題になると、自分の考えがうまく表現できなくなってしまう児童がいる。ア ・かけ算やわり算といった計算技能の定着に習熟の差が見られる。イ	・問題場面がイメージしやすくなるようにICTを活用し、問題場면을視覚的に整理することで問題解決につながるようにする。ア ・授業中の机間指導を充実させ、苦手意識をもっている児童に重点的に関わり、学習内容の定着を図る。また、朝学習の時間を活用し、基本的な計算技能の定着を図る。イ	通年 通年	
第4学年	・既習事項を活用して問題を解くことに課題がある。ア ・授業で身に付けた問題の解き方について、少し時間が経つと、解き方を忘れてしまう児童がいる。イ	・単元に関わりのある問題を授業のはじめに解くなど、導入部分で既習事項の復習をすることを重視する。また、問題を解く際に既習のどの部分を活用しているかを指導で明確にする。ア ・教科書の補充問題に積極的に取り組み、問題を解く量を増やすことで計算技能の定着を図る。イ	通年 通年	
第5学年	・既習事項を活用し自分の考えを表現できる児童が一定数いるが、応用問題やテストなどになると立式できず、既習事項が活用できない児童がいる。ア ・作図、計算などの表現が丁寧でなかったり、定着していなかったりする児童が多い。ア ・計算処理に時間がかかる児童が一定数いる。イ	・自分の考えを表現する場面では、1つの手段だけでなく、式と言葉を結び付けたり、式と図を結び付けたりするなど関連付けて考える場面を設ける。ア ・机間指導で理解が定着していない児童を確実に把握することで、朝学習等の時間に個別指導を行い、基礎基本の定着を図る。ア ・朝学習の時間に既習の計算問題に取り組みせることで、基本的な計算技能の定着を図る。イ	通年 通年 通年 朝学習	

第6学年	既習内容の定着が不完全な児童が多く、既習内容を活用し解決策を導くところでつまずく児童がいる。ア	- 既習内容の定着を図れるように、東京ベーシック・ドリル活用する。ア - 単元の初めに、関連する既習項目の復習を導入で行い、児童の思考へとつながるようにする。ア - 家庭学習での定着を図る。イ	通年	
	基本図形の面積の求め方、速さなど単位量あたりの意味、データ処理での表の活用などが定着していない児童が多い。イ	マス計算、東京ベーシック・ドリルの活用など朝学習などを活用し継続的に取り組む。イ	通年	
	計算処理に時間がかかったり、作図が雑であったりする児童が多い。イ		通年	

■「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた一人一台端末等 ICT の効果的な活用について

- 1年：ノートの写真をロイロノートで撮り、友達の考えを学級全体で見られるようにする。考えを共有することで、多様な考えや深い学びにつながるようにする。また、ミライシードを活用して、基礎的な問題の定着を図る。
- 2年：ロイロノートの提出機能を使い、それぞれの考えを交流する場面を意図的に設定する。また、ミライシードを活用することで基礎的な計算技能の習熟を図る。
- 3年：ロイロノートの提出機能を使い、児童がそれぞれの考えを確認したり、質問したりする場面を意図的に設定する。
- 4年：自分の考えを書いたノートをロイロノートの提出機能を使い、共有する。そこから考えを広げたり、共通点や相違点を見付けたりする。
- 5年：自分の考えをもち、表現できるように解決の見通しをもたせる。考えの発表では、児童のノートを黒板に映すことで考えの相違点に気付かせたり、友達の考えと自分の考えを比較させたりすることで、全体での話し合い活動がどの児童にとっても主体的な活動になるようにする。
- 6年：自分の考えをもち、表現できるように解決の見通しをもたせる。考えの発表では、ロイロノートや iPad でノートに表した考えを黒板に映し、複数の考えや式などを比較しやすい場を設定する。
- 全学年：ロイロノートを活用して、考えを広げる機会を設ける。

■学習の見通しをもたせることや学習を振り返ることの工夫等、「学びに向かう力」の育成に向けた取組について

- 1年：学習の流れを提示し、見通しをもたせる。学習の終わりに学習の振り返りをさせることで、次時への意欲につながるようにする。また、ノートを見て学習が振り返ることができるように、ノートの書き方を少しずつルーティーン化させていく。
- 2年：自分の考えや分かったことなどの振り返りを書く時間を確保する。
- 3年：既習事項を確認することで、学習内容のつながりに目を向けさせるとともに、問題解決型の学習の後には、必ず学習感想を書かせるようにする。
- 4年：既習事項を活用する視点をもたせる。答えを出すまでの過程を評価する。授業で分かったことを自分の言葉でまとめさせる。
- 5年：学習のまとめを、めあてに対して児童の言葉で振り返りを表現する。難しい場合も穴埋めなどにし、少しずつ書けるように促す。
- 6年：学習問題から本時では何をめあてとするのか、児童自身が意図をもって取り組めるめあてを設定する。振り返りでは、めあてに対応して何が分かったのか、自分自身の言葉でまとめられるように繰り返し指導する。

